

大阪教育大学 ○岸本幸臣

神戸山手女子短大 中西真弓

◆目的◆ 最近の住宅平面は従来の公私室型の枠を超え、多様な展開を見せている。しかし一方で、モデル住宅等では内装デザインの個性の強さに関わらず、空間構成上の画一性を感じさせる。この考察は、住宅メーカーの最新プランの図上分析による特性把握と既存プランとの対比から平面構成要素の抽出を試みようとするものである。

◆方法◆ 大手プレハブメーカーが人気が高いと判断したプラン13種と、阪神間の女子短大生から採取した自宅平面図 261種を対象とした。調査実施は前者が1988年11月、後者が1987年7月である。後者に対しては併せて住み方調査を学生・母親・父親に実施している。

◆結果◆ ①居室の構成 一階2公室の内、1室は必ず和室として確保されているが、二階に和室を設けるプランはほとんどない。一階の和室と洋室は分離型と続き間型に二分されるが、これは居室配列が左右分離型か採光面並列型かに影響されている。②動線の処理 玄関ホールと一階各室の動線は循環型が多く、特に水回り空間を通過するものが多い。これは「H⇒DK⇒L⇒H」といった住み方需要の高いことを示している。③LDKの構成 プラン上はLDKとDKが多く、食事とだんらんの一体的住み方の定着が認められる。④既存プランとの比較 動線処理では分離型が多く、循環型でも居間通過型が中心である。またLDKの構成ではDKプランが中心であるが、住み方ではLDK化が進んでいる。更に吹き抜けやLDK室でのカウンターを導入は既存プランでは少ない。

以上、最近の住宅平面は幾つかの構成要素によって定型化の方向を示しはじめていることや、既存住宅のプランとかなり異なる面の多いことが指摘できる。